



落語の すゝめ

良く言われる「毎度馬鹿々々しいお話を一席」とはじまる落語は、現代にも通じる人情味やユーモアにあふれたお話を、個性豊かな落語家たちの話芸で魅了します。

★『志ん朝の落語1』 京須偕充／著 筑摩書房 2003年

三代目古今亭志ん朝ごうほうらいらくは、豪放磊落な五代目古今亭志ん生の三男として生まれ、父親を師匠としましたが、父親のような落語家にはなれないと思い、独自に話芸を研鑽して人気になりました。「志ん朝の前に志ん朝なく、志ん朝の後に志ん朝なし」とも言える実力で、他の落語家を圧倒。五年目という異例の速さで真打に上がりました。その話芸は声質、それから江戸弁の快活さ、しぐさの巧みさが際立っていて、噺のテンポも合わせて完璧です。この本はその凄さがわかる志ん朝の噺を、一言一句もれなく記していて、目の前で本人が噺をしているような感覚になります。ちなみに、「～の前に～なく、云々」は「姿三四郎」や「武蔵坊弁慶」を書いた作家の富田常雄が、柔道家の木村政彦の強さを称賛するために作ったフレーズだそうです。

★『柳家花緑と落語へ行こう』 柳家花緑／著 旬報社 2002年

「人間国宝」五代目柳家小さんの孫の花緑が、落語の成り立ちから寄席の案内、古典落語の解説など落語のいろはを紹介。落語会四派の立川談志、三遊亭小遊三、春風亭小朝ら、出版当時の落語界トッ

プとも対談し、四つの団体が一つの団体になって『夢の寄席』を行うにはどうしたらいいかをそれぞれにぶつけています。

★『落語と私』 桂米朝／著 ポプラ社 2005年

「人間国宝」「上方落語の中興の立役者」などと呼ばれる三代目桂米朝が、中学生にも落語を理解できるように書いた作品です。話芸としての落語の始まりから、落語家によって同じ古典落語のネタでも変化を加えたりすることや、落語家のホームグラウンドの「寄席」の上方と江戸の違いなど、特に上方落語を中心に書かれています。

★『この落語家を聴け!』 広瀬和生／著 アスペクト 2008年

2005年以降の「落語ブーム」の中で、その当時の落語家たちはこんなスゴイ高座を見せていると、著者が厳選した総勢51人を紹介。立川談志・柳家小三治ら大御所から、志の輔・談春・志らく・談笑の立川流、柳亭市馬・柳家喬太郎・春風亭昇太・笑福亭鶴瓶などの大人気の実力派、さらにこれから活躍するかもしれない、当時注目株の古今亭菊之丞等まで、筆者が「いま、観ておかないと、一生後悔することになる」落語家たちへの熱い思いが綴られています。

★『はなし家たちの戦争』 柏木新／著 本の泉社 2010年

戦争中「禁演落語」と「国策落語」という落語がありました。落語家にとってはあまり触れてほしくない言葉です。しかし、落語の歴史の真実を知ることにより、「笑い」について戦時中どのように統制されていて、どのように利用されてきたのか見えてきます。浅草の本法寺に、「はなし塚」を建立し上演禁止した台本等を奉納するとか、古典落語であっても、国策という名のもとに「笑えない笑い」に変えられ、噺家たちが大変な思いをしたのがこの本から伝わります。

2021年1月発行

さいたま市中央区下落合 5-11-11 さいたま市立与野図書館

TEL 853-7816 FAX 857-1946